

音曲の發達を圖り、其功績世に認められんとするに及びて遠逝せしは惜むべし。享年四十九。

④ 川端画學校設立

本校教授川端玉章は公務の傍ら自邸の隣に新たに画學校を設けて經營に当たることとなり、明治四十二年九月九日、川端画學校の開校式が行われた。最初の募集生徒数は五十名で、同校の内容については『美術新報』は次のように報道した。

○川端畫學校新設 日本畫の巨匠川端玉章翁は頃日純日本畫の日々に衰退に赴くは主として正當なる繪畫教育の方法普及せざるに基けるものなりとし爰に一の私立畫學を創立し唯一の官立美術學校を輔翼し且は不完全なる私塾的教育の情弊を打破せんと決心し自ら資を投じて校舎建築の計畫をなせしを同門の出身なる高橋玉淵、福井江亭、端館紫川、諸星成章、戸田玉秀、島崎柳塙、田中頼章^{〔壇〕}其他の諸氏洩れ聞きて大に賛成し門下一統を糾合して其事業を完成せしむることとなりたるに翁も其情誼の厚きを感じ師弟戮力して經營するに決し先づ其敷地として川端邸の隣地なる市有地三百坪許を拂下げ取敢ず五千圓の工費にて第一期の工事即ち六七十坪の總二階建校舎の建築に取掛り遅くも來る四月頃には開校せんと急ぎ居れり、右につき美術教育の經驗に富める正木〔直彦〕美術學校長を始め濱尾新、高嶺秀夫諸氏も非常に賛成し種々有益なる注意を與へられつゝある由 尙校長兼教頭は玉章翁自ら之にあ

たり、教授は門下の先輩に選任し科目は差當り豫科本科専科及夜學部に分ち將來は女子部をも設くる豫定なるが豫備科の入學程度は小學校高等科卒業以上にて修業年限二箇年にして隨時入學を許し△本科は修業期限五箇年にして人物、花鳥、山水并に必須なる學科を教授し△専科は各科目中一科目を撰びて專攻するものとす 又本校教授法の特徴は修業期限を五箇年とせるも隨時成績品を提出して卒業證書を請求することを得せしめ専科も同様成績によりて修業證明書を與へ眞の技術養成を圖るに在といふ 又開校の曉には翁^{〔自ら〕}自校長兼教頭たるの外に、繪畫教員は翁^{〔自ら〕}自これを門下に採り學術教授は他よりこれを聘すべしと。^{〔万朝報記事〕}（萬朝）

○川端畫學校設立協贊會の組織 右に付同門出身の先輩によりて成る幹事會は九日川端邸に於て開會協贊の實を擧ぐる爲め川端畫學校設立協贊會を組織し其事業の一部として協贊會天真會といふを設置し會員五百名を募集して金員の寄附を請ひ之に對し協贊會員即ち川端門下諸氏の揮毫を抽籤にて贈呈する筈なるが、發會は來る五月九日芝公園内紅葉館に於て舉行するに決定し事務所を川端畫塾内に設け庶務會計其他の係員をも定めて幹事諸氏之を擔當すと

（『美術新報』第七卷第二十一号。明治四十二年一月）

○川端畫學校の認可 同校は愈々此程其筋より設立の認可を得たるを以て遠からず校舎の新築工事に取掛由 又同校規則は各科の技術は豫科には臨畫寫生を課し本科には臨畫、植物寫生、動物寫

生、人物寫生、風景寫生、模寫、作圖を課し又本科の學科は東洋繪畫史、有職古寶^(実)、遠近法、圖案法、審美學、應用博物學、和漢文學なりと 尙修業年限は本科五箇年、豫科、研究家は年限を定めずと。

(同第八卷第一号。明治四十二年三月)

○川端畫學校開校式 帝室技藝員川端玉章翁の主宰に係る同校は去九日開校式を執行せり 午前十時を以て式を始め先づ玉章翁校長として祝辭朗讀に次で職員山田敬中氏本校建設の沿革將來の目的意見を陳述し九鬼男爵の代理、正木校長、下條正雄氏の演説、職員總代高橋玉淵氏答辭ありて式を終り夫より餘興として狂言二番あり來賓三百餘名に開校紀念扇子を贈りて散會せり。

(同第八卷第十三号。同年九月)

川端畫學校は人事面において本校との關係が深く、設立主意書(『美術新報』第七卷第二十二号。明治四十二年二月所載)の執筆には正木直彦があたっている。これより本校入学者中に川端畫學校出身者が増え始めた。

⑤ 原田直次郎遺作展覽會

洋画家原田直次郎(明治三十二年十二月二十六日死去)の十四回忌にあたり、友人青山胤通、正木直彦、黒田清輝、森林太郎、徳富猪一郎、長沼守敬らの発起により、明治四十二年十一月二十八日上野

精養軒で紀念會が開かれ、同日正午より本校内で遺作展が開催された。肖像画を主とする数十点が展示され、それらの写真と旧友の懷旧談を載せた『原田先生紀念帖』が翌四十三年に原田直次郎氏紀念會によって発行された。

⑥ 第三回文展

明治四十二年十月十五日より同年十一月二十四日まで上野公園竹の台陳列館で第三回文展が開催された。日本画の部門は国画玉成會が妥協し、今回初めて新旧各派綜合の展覽會となり、審査委員の作では横山大観の「流灯」、竹内栖鳳の「アレタ立に」、寺崎広業の「溪四題」、川合玉堂の「高嶺の雲」等が、また、一般の出品では菱田春草の「落葉」と尾竹国観の「油断」(ともに二等賞)が好評を博した。平福百穂の「アイヌ」の出品もあったが、これは授賞の対象にならなかった。下村観山は出品せず、玉成會研究会展(同年十月六日より不忍池畔勸業協會で開催)の方に「小倉山」を出品して高く評価された。

西洋画は審査委員の作では岡田三郎助の「大隈伯爵夫人肖像」、鹿子木孟郎の「新夫人」、黒田清輝の「鉄砲百合」等が、また、一般の出品では中沢弘光の「おもひで」、山本森之助の「濁らぬ水」、吉田博の「千古の雪」(ともに二等賞)、山脇信徳の「停車場の朝」(褒状)等が好評を博した。

彫刻は審査委員の作では新海竹太郎の「原人」、一般の出品では朝倉文夫の「山から来た男」、荻原守衛の「北条虎吉肖像」(ともに